The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	蘇軾詩の「微物」描写における自我像
Author(s)	趙, 蕊蕊
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2016, 50, p. 25-47
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70033
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

蘇軾詩の「微物」描写における自我像

趙　蕊蕊

キーワード：微物／自我像／微身／物我同一

一　はじめに

中国古代の文学創作において、「人」と「物」の関係は重要な問題として捉えられ、また、様々な形で論じられてきた。人と物の関係については、人が物より優れているという考え方がある。この考え方は、世界に広く見られる。例えば、中国の経典である『尚書』には「人は万物の霊である」[1]とある。イギリスの劇作家シェイクスピアの『ハムレット』にも、「人は宇宙の精華、万物の霊長である」という句がある。これらの言葉には、人がすべての物の頂点に立つ、優れた存在であるという認識が表れている。一方で、『荘子』斉物論篇には、篇名のごとく、人も物も差別無く平等であるという説が唱えられる。中国古典文学においては、むしろこの「万物斉同」の説が、後世の創作に大きな影響を及ぼしている。

例えば、盛唐の杜甫は「万物」を「爾汝（お前）」[2]と称しているが、これは彼が「物」を対等に交流すべき相手として捉えていることの表れであろう。さらに、杜甫の観察眼は世界の微小な、弱々しい「物」たち、老い、病み、従属的な立場にある「物」たちにも向けられる。例えば、「物微意不淺、感動一沉吟（物微なれども意浅からず、感動して一たび沈吟す）」（「病馬」）[3]、「物微世競棄、義在誰肯徵（物微にして世競いて棄つ、義在るも誰か肯て徵せんや）」（「櫻拂子」）[4]などのように、ここで微かな「物」として詠われる病んだ馬や「棕拂子（棕櫚の葉で作られた、蚊やハエを追う道具）」には、杜甫という「人」の微かさが投影されていよう。杜甫が捉えた「微物」とは、志を得ない自分も含む、世界に貶められた「物」である。

このような杜甫の「微物」を用いた表現を承けて、自己を鮮烈に描きだした詩人は北宋の蘇軾である。彼の詩集に自身と「微物」が重ね合わされた表現は散見され、そこには彼の「人」と「物」の関係についての思想を窺うことができる。蘇軾は「微物」を杜甫より強く自身に重ね、自らの憂いや苦しみを詠った。その自己認識において、蘇軾は杜甫よりさらに深みを増していると言えよう。

本稿では、蘇軾の「微物」描写を用いた自我像に着目し、「微物」が詠われる作品の分析を通して、詩人と「微物」がどのように結びつき、共鳴したのか、そして世界の「物」と「人」たる自身の関係をどのように捉え直したのかを明らかにしたい。なお、本稿における「微物」は、本来意味する微小な物はもちろん、枯老・病弱・愚拙・怠惰など、広く世の中から無用とされ、貶められた物も含めて論じる。

二　「微物」描写と「微身」たる蘇軾の人生

「微物」は、世界から貶められ、世界に対して従属的な位置に立つ。蘇軾が、自分自身をあたかも「微物」のような「微身」であると記しているのは、赴任のために各地を転々とし、またしばしば弾劾され左遷された官界での経歴と緊密に結びついている。「微物」が詠み込まれた詩を繫年して整理していくと、そのポイントとなる時期は四つ挙げられる。

まずは、熙寧二年（1069）以降の時期である。蘇軾は「上神宗皇帝書」や「再上皇帝書」を奉り、新法を激しく批判したことが仇となって弾劾され、その翌年やむをえず地方官への転任を求めた。これ以後、蘇軾は常に詩の中で「身微」の境遇を述べている。

早歳便懐齊物志、微官敢有濟時心。　早歳　便ち懐く　斉物の志、微官　敢えて有さん　済時の心。
（「次韻柳子玉過陳絶糧二首」其二、『合注』巻六、熙寧四年（1071）陳州での作）

身微欲安適、坐待東方啟。　身微にして安くにか適かんと欲す、坐して東方の啟くを待つ。
（「七月一日出城舟中苦熱」、『合注』巻七、熙寧五年（1072）杭州での作）

身微空志大、交淺屢言深。　身微にして空しく志大なり、交浅くして屢しば言深し。
（「和潞公超然臺次韻」、『合注』巻一四、熙寧九年（1076）密州での作）

以上の句から、蘇軾の「微身」の意識は、政治的主張、個人的価値観が認められない状況下に生じたものであることが見て取れよう。

第二の時期は元豊二年（1079）以降の時期である。蘇軾は元豊二年（1079）、いわゆる「烏台詩案」によって朝廷を誹謗した罪に問われ、御史台の獄に下る。生死の境に直面した蘇軾は、「予以事繫御史臺獄、獄吏稍見侵、自度不能堪、死獄中、不得一別子由。故作二詩授獄卒梁成、以遺子由（予　事を以て御史臺の獄に繫がれ、獄吏稍や侵さる、自ら度るに堪うる能わず、獄中に死して、子由と一別するを得ざらんと。故に二詩を作りて獄卒の梁成に授け、以て子由に遺る）」其二（『合注』巻一九）に「夢繞雲山心似鹿、魂驚湯火命如雞（夢は雲山を繞りて心は鹿に似たり、魂は湯火に驚きて命は鶏の如し）」と言うように、あたかも厨房の鶏鴨のように、自らにはなすすべのない危機に瀕して恐れおののいている。翌年、運よく死罪を免れた蘇軾は、団練副使として僻地黄州へ流される。以後、蘇軾はこのことを思い出すたびに夢にうなされるほどであった。(5)「書『南史』盧度傳」にも次のように述べる。

自去年得罪下獄、始意不免、既而得脱、遂自此不復殺一物。有見餉蟹蛤者、皆放之江中。……但以親經患難、不異雞鴨之在庖廚、不忍復以口腹之故。

（去年　罪を得て獄に下されしより、始め免れざらんと意（おも）うも、既に脱するを得、遂に此れより復た一物も殺さず。蟹蛤を餉らるる有らば、皆之を江中に放つ。……但だ親（みずか）ら患難を経るを以て、鶏鴨の庖廚に在るに異ならず、復た口腹の故を以てするに忍びず。(6)）

生命の危機に瀕した詩禍を経験した後、蘇軾は生命を重んじ、同じく生ある万物に哀憐の情を強くしている。黄州で

の蘇軾は、捕まえた魚や蝦を放してやると同時に、友人の殺生を戒めている。このことは「岐亭五首」（『合注』巻二三）序にも言及がある。

余久不殺、恐季常之爲余殺也、則以前韻作詩、爲殺戒以遺季常。自爾不復殺、而岐亭之人多化之、有不食肉者。（余久しく殺さず、季常の余が為に殺すを恐れ、則ち前韻を以て詩を作り、殺戒と為して以て季常に遺る。（季常）爾（これ）より復た殺さず、而して岐亭の人多く之に化し、肉を食わざる者有り。）

彼の戒めは岐亭の人々の飲食習慣を変えるまでに至っているが、明らかに、蘇軾は自身の悲惨な体験を踏まえて捕えられた物たちへと思いを寄せている。囚われ、虐げられた自身の延長線上につながるものとして微物が捉えられることで、蘇軾はかえって自己への認識をさらに深くしていく。

出獄して半年経っても、黄州に謫居した蘇軾は監視され、自由のない状態にあった。「遷居臨皋亭」（『合注』巻二〇）に

我生天地間、一蟻寄大磨。　我天地の間に生まるること、一蟻の大磨に寄するがごとし。
區區欲右行、不捄風輪左。　区区右行せんと欲するも、風輪左するを捄わず。
……
幸茲廢棄餘、疲馬解鞍馱。　幸いに茲に廃棄の餘、疲馬　鞍馱を解けり。

と述べられる。初めの二句では『晉書』天文志の典故を用い、自分を小さく力もない蟻に喩え、計り知れぬ運命に翻弄される姿を述べる。この詩ではさらに自身を棄てられた「疲馬」になぞらえ、無用に甘んじる状況を詠っている。

こうした心理的な状況以外に、寒冷や飢餓も黄州左遷時期の彼が直面した身体的な苦境である。わずかな俸禄で食いつながねばならず、自ら東坡で荒れ地を開墾するが、貧しいことに変わりはない。そんな自分を、蘇軾はユーモアを交えて「飢鼠」に喩えている（ここには蘇軾の生年が丙子年、すなわち鼠年であったことが関わっていたかもしれない）。例えば「孫莘老寄墨四首」其三（『合注』巻二五）に「我貧如飢鼠、長夜空齧齧（我貧なること飢鼠の如し、長夜　空しく齧を齧む）」、「寄蘄簟與蒲傳正」（同上）[7]に「東坡病叟長羈旅、凍臥飢吟似飢鼠（東坡の病叟長く羈旅す、凍臥　飢吟　飢鼠に似たり）」とある。ネズミは雑食で、何でも食べるので、『詩經』魏風では、「碩鼠」は飽くことなく搾取する役人に喩えられる。だが、蘇軾は自身を飢えたネズミに喩え、貧しく食べる物もない状態を自嘲している。また、「笑看飢鼠上燈檠（笑いて飢鼠の燈檠に上るを看る）」[8]、「爲鼠常留飯、憐蛾不點燈（鼠の為に常に飯を留め、蛾を憐れみて灯を点ぜず）」[9]とも言うように、黄州での生活での嘲笑や哀憐は「飢鼠」という「微物」と自己という「微身」に等しく向けられている。「微物」と「微身」が相応じ同一視される蘇軾の「蟻」や「鼠」の描写には、実際の困窮した生活が映し出されると同時に、強い政治的圧力下にあっての自己の無力感が滲み出ている。

そして、第三の時期は元豊八年五月、神宗の逝去が画期となる。司馬光ら旧法党が政治の舞台に返り咲き、新法は全面的に否定される。十月、旧法党の蘇軾は起居舍人として朝廷に召され、ついで元祐元年（1086）、中書舍人、翰林学士となる。彼は時流に流されず、新旧両法の利害を公平に提出した。結果、彼は旧法党に排斥され、元祐党争において「上與執政不合、下與本局異議（上に執政と合わず、下に本局と議を異にす）」[10]という進退窮まる立場に置かれ、とうとう病気を理由に外任を求めるようになる。政治の中枢に復帰したはずのこの時期、彼は「枯老」「無用」

をもって自身に喩え、以下のような詩句を詠んでいる。

君才不用如澗松、我老得全猶社櫟。　君が才　用いられざること澗松の如し、我老いて全を得ること猶お社櫟のごとし。

（「次前韻送程六表弟」、『合注』巻三〇）

君如老驥初遭絡、我似枯桑不受條。　君は老驥の初めて絡に遭うが如し、我は枯桑の條を受けざるに似たり。

（「葉公秉、王仲至見和、次韻答之」、『合注』巻三一）

誰惜異才蒙徑寸、自慚枯枿借凌霄。　誰か惜しまん　異才の徑寸を蒙るを、自ら慚ず　枯枿　凌霄に借るを。

（「再和」、『合注』巻三一）

『荘子』において「社櫟」は無用であるがゆえに長寿を保つ植物で、「枯桑」「枯枿」は枯れ衰えた植物である。蘇軾は自己を枯れた植物に喩え、体が衰弱し、老いてしまった感慨を述べる。

更に注意すべきは、彼が自らを「早衰」の人と言うことである。

況我早衰人、幽居氣如縷。　況んや我　早衰の人、幽居して気　縷の如し。

（「七月五日二首」其一、『合注』巻一四、熙寧九年（1076）、四十一歳）

早衰怪我遽如許、苦學憐君太瘦生。　早衰して怪しむ　我が遽に許くの如きを、苦学して憐む　君が太だ瘦生なるを。

（「次韻答頓起二首」其二、『合注』巻一七、四十三歳）

ここでは、「早衰」を生命の衰弱と解釈するよりは、むしろ官僚としての不遇さを詠うものと捉えてよいだろう。[11] 中央に復帰してもなお、「微物」と同じ自分を蘇軾は見つめていた。

第四の時期は、紹聖元年（1094）の四月、哲宗が神宗の政策方針へと舵を戻し、新法党が再び権力を握ってから以降の時期である。蘇軾は竜図閣学士を免じられ、承議郎として知英州となるが、六月赴任の途中さらに寧遠軍節度副使に任命され、恵州に安置される。十月に左遷先に至るが、この半年間の目まぐるしい任免を経て、彼は「此身如綫自縈繞、左旋右轉隨繅車（此の身　綫の如く自ら縈繞し、左旋右轉　繅車に随う）」[12] という思いに至る。運命をコントロールできない苦痛は、「辨道歌」（『合注』巻三九）にも表れている。

安知聚散同魚蝦、自纏如繭居如蝸。　安んぞ知らん　聚散　魚蝦に同じきを、自ら纏うこと繭の如く居は蝸の如し。
日懐嗔喜甘籠笈、其去死地猶獵猥。　日に嗔喜を懐きて籠笈に甘んず、其れ死地を去ること猶ほ猟猥のごとし。

ここでは、「魚蝦」「繭」「蝸牛」「籠中鳥」のような意志を持たない小動物に自身を託し、人生の無常感や束縛を余儀なくされた不自由さについて述べている。また「和孔周翰二絶・觀靜觀堂效韋蘇州詩」（『合注』巻十五）に「弱羽巣林在一枝、幽人蝸舍兩相宜（弱羽　巣林　一枝に在り、幽人　蝸舍　両つながら相宜し）」とある。蘇軾は『古今注』[13] の典故を用い、左遷された自分の住まいを「蝸」という「微物」に託しているのである。ここに至って、蘇軾はそれらの「微物」、その境遇に充足しているかのように見える。

また、「次韻定慧欽長老見寄八首」其七（『合注』巻三九）に「微生山海間、坐受瘴霧侵（微生　山海の間、坐して瘴霧に侵るを受く）」とある。瘴気に満ちた劣悪な環境の嶺南にあって、再び蘇軾の「微身」意識は強く表れるが、詳しくは後述したい。

官僚生活における度重なる左遷とそれに伴う羈旅は、詩人の精神を大いに苦しめた。士大夫として自らを批判する中で、蘇軾は貶められ、従属的な立場に置かれた「微物」の生きる姿に自己を見出し、また諧謔の鋭い言葉で自身の苦境を飾らずに述べている。総じて蘇軾は、自身を抑圧する大いなる力の下で、運命をコントロールできない自分を「微物」に託していると言えよう。挫折に満ちた官界の経験は、蘇軾の抱いていた大志に疑問を生じさせ、自分の価値を否定するような発言をするが（例えば「如我自觀猶可厭（我の如きは自ら観るに猶も厭うべし）」[14]、さらに「閑物」、「支離の人」[15]など）、それは消極的な自己否定につながるものではない。蘇軾の徹底した「微物」の観察は、貶められ、従属を強いられているはずの「微物」の価値を見いだすに至るのである。

三　「微物」と「微身」に賦与された価値

中国古代の知識人は士大夫として意を得ず、逆境にある時、陶淵明が「拙を守り」、杜甫が「拙を養い」、白居易が「拙を詠う」[16]ように、「拙」、自身の身を立てるつたなさについて触れているが、これらは、『老子』における「抱樸（生まれながらの性質を保つこと）」の思想に基づいたものと言えよう。蘇軾は先人を受け継ぎ、これを「微物」に託すことで文学表現をさらに深めていった。例えば、元豊四年（1081）黄州の作「應笑謀生拙、團團如磨驢（応に謀生の拙なるを笑うべし、団団たること磨驢の如し）」[17]、元祐元年（1092）揚州での「團團如磨牛、歩歩踏陳迹（団団

たること磨牛の如く、歩歩　陳迹を踏む」[18]という詩句は、回りながら臼を碾く牛や驢馬に「拙」なる自分自身を喩えている。また、熙寧五年（1072）杭州在任中、「送岑著作」に次のようにある。

我本不違世、而世與我殊。　我本より世に違わず、而して世我と殊なれり。
拙于林間鳩、懶于冰底魚。　林間の鳩よりも拙たり、冰底の魚よりも懶たり。
人皆笑其狂、子獨憐其愚。　人　皆其の狂を笑う、子　独り其の愚を憐む。
直者有時信、靜者不終居。　直なる者は時に信有り、静なる者は終に居らず。
而我懶拙病、不受砭藥除。　而して我が懶拙の病、砭藥の除くを受けず。[19]

自分は世に逆らうつもりはなくとも、世は自分と同じでない、と歌い起こす。巣を作るのが下手な鳩よりも「拙」、氷の底に潜む魚よりも「懶」であると自らを評しているが、注目すべきは、ここで「微物」に託された自身の「懶拙の病」、怠惰や愚拙などの本性は[20]「砭藥の除くを受けず」、治療できない、不治の病であると述べている点である。前節には貶められ、屈従させられた「微物」に自身を重ねる蘇軾の詩を見てきたが、ここで「微物」に託された彼自身には、抑圧するもの（「世」）に迎合せず、自己を貫こうとする姿勢が見て取れる。

それでは、前節に見たように精神的・肉体的に「微」なる自身を貶め、苦しめる「世」に対し、蘇軾は完全に背を向けてしまったのだろうか。先に挙げた詩に「我本より世に違わず」と宣言するとおり、決してそうではない。例えば、有用な力を持つ「微物」たちに蘇軾は着目する。「元修菜」（『合注』巻二二）に「潤隨甘澤化、暖作青泥融。始終不我負、力與糞壤同（潤は甘沢に随いて化し、暖は青泥の融くるを作す。始終　我に負かず、力むること糞壤と同

じ）」、「櫻筍」（『合注』巻三三）にも「願隨蔬果得自用、勿使山林空老死（願わくは蔬果に随いて自ら用うるを得ん、山林に空しく老死せしむる勿れ）」とある。微小な存在に過ぎない彼らが意外な力を持ち、有用であることを詠い、またその力が空しく用いられないことのないようにと願う。それは「微物」への慈しみと同時に、「微身」すなわち自分自身への祈りでもあったであろう。

そのほか、蘇軾には「社櫟」のような無用であるがゆえに生命を全うする「微物」に自身をなぞらえる例もある。例えば、「次韻黄魯直見贈古風二首」其一（『合注』巻一六）に「顧我如苦李、全生依路旁（我を顧りみれば苦李の如く、生を全うして路旁に依る）」、「次韻王定國南遷回見寄」（『合注』巻二四）に「君知先竭是甘井、我願得全如苦李（君知る　先づ竭くるは是れ甘井、我は願う　全きを得ること苦李の如きを）」とある。周知のとおり、「社櫟」は木材にならず、「苦李」は食べられない。しかし、これらは荘子の「無用の用」を体現し生命を全うする「微物」である。ある時は有用な「微物」を詠い、ある時は無用な「微物」を詠うこと、これは「微物」に蘇軾の自己認識が強く反映されていることを示している。「世」に貢献できればそれは有用であるし、できなければそれは無用となる。しかし無用な「微物」、そして自身の「懶拙の病」を蘇軾は否定せず、全面的に肯定している。ここに、蘇軾の描写する「微物」、そしてその自己認識に表れたる精神の強靱さを認めることができよう。

自己を観察する時、蘇軾はしばしば「身」と「心」[21]の両方からそれを行う。典型的な例は「自題金山寺畫像」（『合注』巻五〇）の「心似已灰之木、身如不繫之舟（心は已に灰たるの木に似たり、身は繫がざるの舟の如し）」という句である。これらの身と心の対照はしばしば相補う形で、現実の自我像と理想の自我像とを表現している。

興味深いことに、蘇軾は身と心を表現する際にも「微物」を用いて表している。例えば、熙寧五年（1072）に作られた「次韻孔文仲推官見贈」（『合注』巻八）に「我本麋鹿性、諒非伏轅姿（我　本は麋鹿の性、諒に轅に伏する姿

に非ず）」とあり、熙寧八年（1075）、密州において書かれた「游盧山、次韻章傳道」（『合注』巻一三）に「塵容已似服轅駒、野性猶同縱壑魚（塵容　已に轅に服する駒に似たり、野性　猶お壑を縱にする魚に同じ）」とある。また、元豊五年（1082）、黄州において作られた「次韻孔毅父久旱已而甚雨三首」其一（『合注』巻二一）に

我雖窮苦不如人、要亦自是民之一。　　我は窮苦すると雖も人に如かず、要は亦た自ら是れ民の一なり。
形容雖是喪家狗、未肯聃耳爭投骨。　　形容は是れ喪家の狗たりと雖も、未だ肯て耳を聃(た)れて投骨を争わず。

とある。ここでは、「服轅駒」や「喪家狗」になぞらえられる詩人の外見は、「世」における様々な制約の下にある。それに対し、詩人の内面は、「麋鹿性」や「縱壑魚」[22]、「世」の束縛には関係なく、自由を謳歌する存在になぞらえられる。つまり、蘇軾の自我像は外面において貶められ、従属させられる「微物」を装ってはいるものの、内面はその抑圧を超越した、自由かつ奔放な精神を秘めているのである。

なお、右に見た詩句は杜甫の「昔如縱壑魚、今如喪家狗（昔は縱壑の魚の如く、今は喪家の狗の如し）」[23]を意識している表現だと思われるが、自己認識とそこに表れた感情は大きく異なっている。杜甫は「過去の私」と「現在の私」の比較を強調し、過去の自由な姿を懐かしみつつ、現在には強い悲哀だけが残される。それに対して、蘇軾は「自己の外面」と「自己の内面」に注意を払い、精神の自由を強調しながら、現在の悲哀を超克している。[24]

以上に見てきたように、蘇軾は「微物」の「有用」と「無用」を直視し、これらをともに肯定することで、貶められ、屈従させられた「微物」に独自の価値を賦与している。さらにはそうした「微物」に外面と内面を設定することで、抑圧への屈従を表面的なものにすりかえ、ついにはそれらの自由な精神を宣言するに至る。蘇軾の「微物」描写

は、彼の「世」に向き合う強靱な精神力に支えられ、「微物」本来の姿を超えて、自己認識を託す文学表現となったのである。

四　「微物」における物我同一

蘇軾は「微物」と「微身」とを結びつけ、一体化することで、貶められ、従属的な立場に置かれた「微物」に苦境の自分を重ねて表現した。また無用とされる「微物」に「無用の用」の観点から価値を与え、さらにその内面を設定することで自由な精神を主張した。「観物」であっても「観我」[25]であっても、そこからは蘇軾の満ち足りた、楽観的な姿勢が窺える。密州において書かれた「超然臺記」の「凡物皆有可觀。苟有可觀、皆有可樂、非必怪奇瑋麗者也。（凡そ物は皆観るべき有り。苟くも観るべき有らば、皆楽しむべき有り、必ずしも怪奇瑋麗なる者に非ざるなり）」[26]は、物が楽しむべきものであることを述べている。類似した発言は「寶繪堂記」にも「君子可以寓意於物、而不可以留意於物。寓意於物、雖微物足以爲樂（君子は以て意を物に寓すべきも、以て意を物に留むべからず。意を物に寓すれば、微物と雖も以て楽と為すに足れり）」[27]とある。ここに言う「楽」とは世間一般の楽しみではなく、詩人の実際の体験や哲学的思考を含めた「自得」、あるいは「自娛」であり、[28]さらに栄辱や窮達も度外視した態度であることは、先に見たとおりである。

王水照氏、吉川幸次郎氏、山本和義氏などに既に指摘があるように、蘇軾は人生の無常や生命のはかなさを言うとき、しばしば「人生如寄」という表現を用いている。[29]最初の例は熙寧十年（1077）、蘇軾は「宦遊到處身如寄（宦遊到る処　身は寄するが如し）」[30]と詠い、また「人生如寄何不樂（人生は寄するが如く何ぞ楽しからざる）」[31]と言った。

こうした意識は左遷されてより明確になっていった。先に見た黄州における「一蟻寄大磨」のほか、「臨江仙・夜歸臨皋」詞に「小舟從此逝、江海寄餘生（小舟は此従り逝き、江海に餘生を寄せん）」[32]とある。嶺海に左遷された時の「吾生如寄耳、嶺海亦閒游（吾が生は寄するが如きのみ、嶺海も亦た閒游せん）」[33]という句もある。「閒游」や「何不樂」などという言葉からは、自身が貶められ、否定された時にもそれを楽しむ蘇軾の超然とした態度が窺われよう。

また、紹聖三年（1096）に書かれた「遷居」（『合注』巻四〇）に

吾生本無待、俯仰了此世。　吾が生は本と待つ無く、俯仰して此の世を了す。
念念自成刼、塵塵各有際。　念念　自ら刼を成し、塵塵　各おの際有り。
下觀生物息、相吹等蚊蚋。　下に生物の息を観れば、相吹くこと蚊蚋に等し。

度重なる左遷によって蘇軾は現実を直視し、自分の前途に過度な期待を寄せることなく、ただ残りの人生を過ごすだけだと言っている。仏教において、天地が生じてから滅ぶまでを「一刼」と言うが、ここでは人生の始まりから終わりまでがあっという間に過ぎ去ることを「念念成刼」と言っている。この詩は仏典の言葉を使っているほかに、『荘子』の典故も用い[34]、広く世界を見れば、人を含めた万物はみな蚊や虫のような矮小な存在だと言っている。世界全体において物や人の生命ある者は、すべて平等な状態にある。ここで蘇軾が、生死を一瞬のことと見なして、生死にも窮達にも全く拘泥しない超然とした態度を表すとき、万物は等しく蚊のような「微物」となるのである。

また、紹聖四年（1097）の四月、蘇軾は再び昌化軍（海南省儋県）に左遷された。六十二歳の蘇軾はこの旅に際して「垂老投荒、無復生還之望（垂老　荒に投ぜらる、復た生還の望み無し）」、また「首當作棺、次便作墓（首めに

当に棺を作り、次いで便ち墓を作るべし」[35]と言った。そして絶域において「食無肉、病無藥、居無室、出無友、冬無炭、暑無寒泉（食に肉無し、病に薬無し、居に室無し、出づるに友無し、冬に炭無し、暑に寒泉無し）」という環境に身を置き、「藥、米、醬、薑、糖」[36]も調達してもらう有様であった。「幽居亂黿黽、生理半人禽（幽居　黿黽乱れ、生理　人禽半ばす）」[37]のような僻地にありながら、なお「我本海南民、寄生西蜀州（我本と海南の民、生を西蜀の州に寄す）」[38]といった達観した発言も見られる。翌年の元符元年（1098）に書かれた「試筆自書」には、

吾始至南海、環視天水無際、悽然傷之曰「何時得出此島耶。」已而思之、天地在積水中、九州在大瀛海中、中國在少海中、有生孰不在島者。覆盆水於池、芥浮於水、蟻附於芥、茫然不知所濟。少焉水涸、蟻卽徑去、見其類、出涕曰「幾不復與子相見、豈知俯仰之間、有方軌八達之路乎。」念此可以一笑。

（吾始めて南海に至る、環視すれば天水際無し、悽然として之を傷みて曰く「何れの時ぞ此の島を出づるを得んや」と。已にして之を思うに、天地は積水の中に在り、九州は大瀛海の中に在り、中国は少海の中に在り、生有るは孰れか島に在らざらんや。盆水を池に覆い、芥　水に浮び、蟻　芥に附して、茫然として済（わた）る所を知らず。少焉にして水涸れ、蟻即ち徑ちに去りて、其の類を見、涕を出して曰く「幾ど復た子と相見えざらんとするに、豈に知らん俯仰の間、方軌八達の路有るを」と。此を念いて以て一笑すべし）[39]

とある。ここで、蘇軾は天地・九州・中国・生命ある物を設定し、天地が積水にあることから語り起こして、万物はみな島にいるとして、現在海南島にいる自らの境遇を相対化している。それから今度は設定をミニチュア化し、池に浮かぶ草の葉に乗った蟻を想像し、これまた天涯に流された自分を相対化している。明日の生死すら分からぬ劣悪な

環境においても、蘇軾はその苦境に楽しみを求めている。その際、自らが住む世界を巨大化することで自身を「微物」と見なし、また世界をミニチュア化することで自身を笑うべき「微物」の蟻とし、苦境を文章のうちに相対化しようと試みている。また、彼の「行瓊・儋間、肩輿坐睡。夢中得句云『千山動鱗甲、萬谷酣笙鐘』。覺而遇清風急雨、戲作此數句（瓊・儋の間を行き、肩輿に坐睡す。夢中に句を得て云うらく『千山　鱗甲を動かし、万谷　笙鐘酣なり』と。覚めて清風急雨に遇い、戯れに此の数句を作る）」（『合注』巻四一）に、

登高望中原、但見積水空。　登高して中原を望み、但だ見る　積水の空しきを。
此生當安歸、四顧眞途窮。　此の生　当に安くにか帰るべけん、四顧して真に途窮まる。
眇觀大瀛海、坐詠談天翁。　眇として大瀛海を観、坐して談天の翁を詠う。
茫茫太倉中、一米誰雌雄。　茫茫たる太倉の中、一米　誰か雌雄ならん。

自身を万物の一つとして無限の宇宙に置き、中国も世界全体からすれば米粒のようなものだとした『荘子』を引いて、[40] 一個人のちっぽけさを強調している。大いなる天地の主宰者の前では、個人的な喜びや悲しみなど取るに足りない。蘇軾は晩年において、自らが依って立つ「世」をどこまでも拡大していくことによって、自らを「微物」として表現した。この「微物」は、先に見た貶められたそれとは違い、それを取り囲む「世」が広がって相対的に小さくなったものであるから、蘇軾という個人に限定されない。ここに至り、蘇軾の「微物」表現は彼の自己認識を超越し、天地宇宙に対する「微物」としての人間という普遍性を獲得したのである。

五　おわりに

以上に述べたように、「微物」は蘇軾の自己認識における重要な文学的素材であった。もちろん、「微物」の描写だけが彼の自己認識を反映しているわけではなく、自らを他の人になぞらえる作品も少なくない。例えば、元豊七年（1084）に書かれた「蒜山松林中可卜居、余欲僦其地。地屬金山、故作此詩、與金山元長老（蒜山松林中居を卜すべし、余　其の地を僦らんと欲す。地は金山に属す、故に此の詩を作り、金山元長老に与う）」（『合注』巻二四）に、

我材濩落本無用、虛名驚世終何益。
東方先生好自譽、孟賁子路并爲一。
杜陵布衣老且愚、信口自比契與稷。
暮年欲學柳下惠、嗜好酸鹹不相入。

我が材　濩落として本と無用、虛名　世を驚かすも終に何の益あらん。
東方先生　自ら誉むるを好み、孟賁　子路　并せて一と為す。
杜陵の布衣　老いて且つ愚、口に信せて自ら契と稷と比す。
暮年　柳下恵に学ばんと欲し、酸鹹を嗜好して相入れず。

とある。彼は自ら無用の者であると言い、さらに東方朔や杜甫、柳下恵などの人物に自らを託している。ここでは、仮託された人物に才能がないと言うのではなく、彼らの境遇に自分の姿を見たのである。東方朔の自賛、杜甫の老や愚は蘇軾自身の特性を表しているのである。これについて、王文誥は以下のように解釈している。

客有過韻山堂論詩、謂公詆子美太過者、不覺失笑。因曉之曰公作此詩在廢中。自「我材本無用」句後、所列數

人、皆借以自託。……時方以杜自託、寓與世不合之意、肯詆之乎。

（客の韻山堂に過ぎりて詩を論ずる有り、謂く公子美を詆すこと太だ過ぐるは、失笑を覚えずと。因りて之に曉して曰く公　此の詩を作るは廃中に在り。「我材本無用」句自り後、列する所の数人、皆借りて以て自託す。……時方に杜を以て自託し、世と合わざるの意を寓す、肯えて之を詆らんやと。）[41]

王氏は、蘇軾は杜甫を謗っているのではなく、杜甫の失意に強く共鳴したと解している。蘇軾がこれらの人物に仮託したのは、苦境に知己を探し、彼らの処世を学ぼうとしたのであろう。蘇軾は白居易の影響も強く、「似楽天」や「似香山」という言葉を好んで用いている。

定似香山老居士、世縁終淺道根深。　定めて似たり香山の老居士、世縁終に浅くして道根深し。

（「軾以去歳春夏侍立邇英、而秋冬之交、子由相繼入侍。次韻絶句四首、各述所懐」其四、『合注』巻二八）

我似樂天君記取、華顛賞徧洛陽春。　我が楽天に似たる　君記取せよ、華顛　賞徧す洛陽の春。

（「贈善相程傑」、『合注』巻三二）

我甚似樂天、但無素與蠻。　我甚だ楽天に似たり、但だ素と蠻と無し。

（「次京師韻、送表弟程懿叔赴夔州運判」、『合注』巻三二）

このような過去の人物への仮託は、蘇軾の士大夫としての自己認識を表しているだろう。「仕」と「隠」の間を徘

徊した蘇軾は、士大夫であることに懐疑し、功名に執着しなかった馬少游、陶淵明[42]などを敬慕することもあるが、総じて自身を思想や文化の主導者である士大夫として描くことの方が多く、その使命感は常に発揮されていた。彼は欧陽脩から伝えられた「道」を継承し、積極的に弟子に教授し、後進を抜擢した。儋州に左遷された後にも、彼は自らを文化の伝道者と見なし、地元の人に講義をし、彼らが貧しい暮らしから脱するのを手助けしようとした。そこには、自らを聖人に仮託する志向すら見られる[43]。本稿に論じた「微物」描写に託された自画像は、言わばこのような強い士大夫意識という光に照らされて生じた影のようなものであったのではないだろうか。

最後に、蘇軾が「微物」描写を用いて「微物」と「微身」、あるいは「物」と「人」の関係を表現する時、そこに『荘子』の典故がしばしば用いられていることを指摘しておきたい。例えば無用であるがゆえに生を全うする「社櫟」、万物を蚊や蚋（ぶゆ）とみなす比喩「生物の息」、「世」を果てしなく拡大して万物を「微物」に見立てる比喩「太倉中の一米」。蘇軾詩における「微物」表現には、『荘子』の思想が通奏低音として響いているのである。

［注］

（1）『尚書』泰誓上に「惟天地萬物父母、惟人萬物之靈」とある。

（2）「廢畦」に「暮景數枝葉、天風吹汝寒」、「杜鵑行」に「爾豈摧殘始發憤、羞帶羽翮傷形愚」、「枯椶」に「念爾形影乾、摧殘沒藜莠」、「種萵苣」に「野莧迷汝來、宗生實於此」とある。それぞれ唐・杜甫著、清・仇兆鰲注『杜詩詳注』（中華書局、1979年）の巻八。第616頁、巻一〇の837頁、巻一〇。第856頁、巻一五。第1348頁。

（3）『杜詩詳注』巻八。第621頁。

（4）『杜詩詳注』巻一二。第1031頁。

（5）「次韻前篇」に「飢寒未至且安居、憂患已空猶夢怕」とある。清・馮応榴輯訂『蘇文忠公詩合註』巻二〇（中文出版社、一九七九年、以下『合註』と略称）。

（6）孔凡礼点校『蘇軾文集』巻六六（中華書局、1986年）第2048頁。

（7）張志烈、馬徳富、周裕鍇主編『蘇軾全集校注』巻二五（河北人民出版社、2010年、第2778頁）。

（8）「姪安節遠來夜坐三首」其二（『合注』巻二一）に「夢斷酒醒山雨絶、笑看飢鼠上燈檠」とある。

（9）「次韻定慧欽長老見寄八首」其一、『合注』巻三九。

（10）「再乞罷詳定役法狀」、『蘇軾文集』巻二七。第781頁。

（11）「早衰」は杜甫がしばしば詩に詠っている。浦起龍がそれを「『吾衰』、非衰老之謂、蓋謂運蹇不遇也」と解釈するように、蘇軾の「早衰」も比喩的な意味を含むと考えてよいであろう。

（12）「次韻正輔同遊白水山」、『合注』巻三九。

（13）晋・崔豹『古今注』魚蟲に「（蝸）殼如小螺、……野人結圓舍、如蝸牛之殼、故曰蝸舍」とある。

（14）「次韻柳子玉過陳絕糧二首」其二、『合注』巻六。

（15）「龍尾硯歌」（『合注』巻二三）に「我生天地一閑物、蘇子亦是支離人」とある。

（16）陶淵明「歸園田居」に「開荒南野際、守拙歸田園」、杜甫「遣愁」に「養拙江湖外、朝廷記憶疎」、白居易「詠拙」に「所稟有巧拙、不可改者性」とある。

（17）「伯父『送先人下第歸蜀』詩云『人稀野店休安枕、路入靈關穩跨驢』。安節將去、爲誦此句、因以爲韻、作小詩十四首送之」其一四、『合注』巻二一。

（18）「送芝上人遊廬山」、『合注』巻三五。

（19）『合注』巻七。この詩の編年について、旧注及び編年本は熙寧五年（1072）年とする。張志烈、馬徳富、周裕鍇主編『蘇軾全集校注』はそれと異なるが、本稿は旧注に従う。

（20）「渼陽早發」（『合注』巻二）に「自進苟無補、乃是嬾且愚」、また「和子由聞子瞻將如終南太平宮谿堂讀書」（『合注』巻四）に「我誠愚且拙、身名兩無謀」とある。

(21)「次韻王鞏獨眠」(『合注』巻一七)に「居士身心如槁木、旅館孤眠體生粟」、「安國寺浴」(『合注』巻二〇)に「心困萬緣空、身安一牀足」、「豆粥」(『合注』巻二四)に「干戈未解身如寄、聲色相纏心已醉。身心顛倒不自知、更識人間有眞味」、「和黄魯直燒香二首」其二(『施註蘇詩』巻二五、景印文淵閣四庫全書本)に「一炷煙消火冷、半生身老心閑」などとある。

(22) 王褒「聖主得賢臣頌」(『文選』巻四七)に「翼乎如鴻毛遇順風、沛乎若巨魚縱大壑」とある。

(23)「將適吳楚、留別章使君留後、兼幕府諸公」(『杜詩詳注』巻一二。第1064頁)、また、『史記』孔子世家に「(孔子)纍纍若喪家之狗」とある。

(24) 蘇軾による悲哀の止揚については、つとに吉川幸次郎氏に指摘がある。吉川幸次郎『宋詩概説』(岩波書店、1962年)第35頁。

(25)「西齋」(『合注』巻一三)に「杖藜觀物化、亦以觀我生」とある。

(26)『蘇軾文集』巻一一。第351頁。

(27)『蘇軾文集』巻一一。第356頁。

(28) 黄州において書かれた「與王定國四十一首」其一(『蘇軾文集』巻五二、第1513頁)に「感恩念咎之外、灰心杜口、不曾看謁人。所云出入、蓋往村寺沐浴、及尋溪傍谷釣魚採藥、聊以自娛耳」、また「與子明兄一首」(『蘇軾文集』巻六〇。第1832頁)に「吾兄弟俱老矣、當以時自娛。世事萬端、皆不足介意。所謂自娛者、亦非世俗之樂、但胸中廓然無一物。卽天壤之内、山川草木蟲魚之類、皆是供吾家樂事也」とある。

(29) 王水照「蘇軾的人生思考與文化性格」(『文學遺産』、1989年第5期)を参照。王氏に據れば、蘇軾詩集における「吾生如寄」の表現は計九回、それぞれ熙寧十年一回、元豊二回、元祐四回、紹聖以後二回である。また、日本学者吉川幸次郎『宋詩概説』第三章の第三節「蘇軾その二巨視の哲学」(岩波書店、1990年、第134-157頁)山本和義『詩人と造物―蘇軾論考』第一部「蘇軾詩論稿」の第2篇(研文出版、2002年、第20-28頁)を参照。

(30)「至濟南、李公擇以詩相迎、次其韻二首」其一、『合注』巻一五。

(31)「答呂梁仲屯田」、『合注』巻一五。

(32) 薛瑞生箋證『東坡詞編年箋證』巻二、三秦出版社、1998年。第376-377頁。

(33)「鬱孤臺」、『合注』巻四五。

(34)『荘子』逍遙遊篇に「野馬也、塵埃也、生物之以息相吹也」とある。
(35)「與王敏仲十八首」其十六、『蘇軾文集』巻五六。第1695頁。
(36)「與程秀才三首」、『蘇軾文集』巻五五。第1628-1629頁。
(37)「遷居之夕、聞鄰舍兒誦書、欣然而作」、『合注』巻四一。
(38)「別海南黎民表」、『合注』巻五〇。
(39)宋・朱弁撰『曲洧舊聞』巻五、清知不足斎叢書本。
(40)『荘子』秋水篇に「計中國之在海內、不似稊米之在太倉乎」とある。
(41)王文誥『蘇軾詩集』巻二四（中華書局、1982年）、第1277-1278頁。
(42)「山邨五絶」其五（『合注』巻九）に「不須更待飛鳶墮、方念平生馬少游」、「次韻田國博部夫南京見寄二絶」其二（『合注』巻一八）に「大夫行役家人怨、應羨居鄉馬少游」、「陶驥子駿佚老堂二首」其一（『合注』巻二三）に「淵明吾所師、夫子乃其後」などとある。
(43)黄小珠「論蘇軾貶謫詩文中天命觀的變化」（『甘肅社會科學』2015年第3期、第25頁）を参照。

（大学院博士後期課程学生）

摘要

蘇軾“微物”書寫中的自我形象定位

趙 蕊蕊

“微物”在蘇軾構建自我的過程中佔有重要地位，其背後亦有深刻的文化內涵。他常以遊戲的筆法在“微物”和“自我”之間建立深層而複雜的聯繫，又透過“微物”來發現自我，表現自我。基於不同的精神訴求，蘇軾“微物”書寫中的自我形象也呈示出較爲複雜的價值取向。無論是“觀物”還是“觀我”，他皆以士大夫的身份將自我放在思想文化的中心，並始終保持著曠達超然的心態。要而言之，蘇軾在自我實現過程中，既注重主體選擇及個性表現而又未全然放棄傳統文化中特定的精神歸向。這些眾多的自我形象，還從不同層面折射出蘇軾積極進取與退守求全相交織的複雜思想。